



タイの床屋

すぎはら整形外科

杉原泰洋

もう三十数年前の話になるが、研修医の頃に夏休みを利用してタイへ旅行したことがある。チケットだけ買って現地の安宿を探しながら旅するいわゆるバックパッカーで、観光地を観ることよりも、観光地までの道のりを楽しむ旅行が好きだった。

学生の頃とは違って休暇は一週間しかないので、宿泊の予定地はだいたい決まっていた。タイといってもバンコックや海岸沿いのリゾート地ではなく、観光地のない山間の東北部を選んだ。かなりマイナーな旅行ルートだったため、鈍行列車を利用するので移動するだけでかなりの時間を費やした。

そこはノーンカイといって、ラオスとの国境沿いにある小さな町だった。タイ最北地の終点駅というたい文句がガイドブックには書いてあったが、着いてみると降りる客はまばらだった。当然、東南アジアでよく見かける旅行客相手に寄って来る人間は誰もいなかった。

特に観光する場所もないので、ラオスとの国境になっているメコン川まで歩いてみることにした。歩いて十数分ほどすると、目の前にメコン川が大きく蛇行しながら横たわっていた。さすがに大河にふさわしく、濁った水が川幅からはみ出しそうなくらいにたつぷりと、そしてゆったりと動いていた。国境近くの辺境な地というものもあるだろうが、河の向こうに見える対岸のラオスの風景は、かなり殺風景だった。おそらく竹で編んだと思われるちいさな家がぼつぼつと見え、そこに動く人の姿が見えた。

河をしばらく眺めたあと、どこに行く当てもなく街をぶらぶらと歩いていたら、白いペンキで塗られた平屋建ての小さな病院が建っていた。のん

びりした雰囲気その病院は、わたしの目を引いた。一日おきに救急で呼び出しを食らう大きな総合病院で研修を積んでいた私には、なんとも羨ましく、こんな病院で働いてみたいと本気で思った（それが、数年後に実際にフィリピンの田舎の病院で一年間過ごすことになるうとはこのときは夢にも思わなかった）。

病院を通り過ぎて少しすると、小さな床屋が目に入った。土産話代わりに、タイの田舎で髪でも切ってもらうのも悪くないなと思い立ち、中に入ってみた。誰もいなかったので奥の部屋に声を掛けると、店主であるらしい中年の男が出てきた。外国人の私を見ると怪訝そうな顔をしたが、二本の指で髪を挟んで髪を切る仕草をすると、（そうか、そうか）と言うように急に表情を崩した。

椅子に座ってから鏡の写った後ろに目をやると、幾段もの棚に小さめの瓶詰めが所狭しと並べられていた。目を凝らして見ると、それは食べ物ではなく、何かの標本のようなだった。店主にあれは何かと尋ねると、彼は指で自分の歯を叩いた。「？」と思ったが、わたしの不可解な表情を察した店主はニコニコしながら、あれは全部自分が抜いた歯だと教えてくれた。床屋の赤と青の螺旋看板は動脈と静脈で、昔の床屋は外科医院も兼ねていたというが、わたしが行ったときには、まだその名残が残っていた。

最近BSで「弾丸を噛め」という映画を観たせいで、このタイの床屋のことを思い出したのだが、ジーン・ハックマンやキャンディス・バーゲンといった往年の名優が出ている西部劇だった。あるシーンで流れ者が店の前に立っていて、頬は虫歯で腫れていた。看板には「BarBer & Dentist」と書いてあった。その男は客の髪を切っている店主

に声をかけて自分の口を開くと、店主はその口をのぞき込み、手に負えないとばかりに首を横に振って追い返す場面があった。どうやら床屋と歯医者兼ねるというのは、タイの田舎に限らず世界共通のものらしい。ただ、ここでは時代が少し遡ったままの状態で止まっているらしかった。

それにしても抜いた他人の歯を飾っておくのはどうなのかと思ったが、店主にしてみれば、自分の実績を宣伝するものであるらしい。歯を削るドリルらしきものは一切なく、おそらく抜くだけなのだろう。麻酔の注射をする資格はないだろうに、どうやって歯を抜くのか、ちょっと想像しにくかった。店主はニヤニヤしながらお前の歯は大丈夫かと聞いてきたので、口を固く閉じたまま首を

横に振ると、店主も笑って頷いていた。

なんだかんだと店主と話が弾んだせいか、終わってみて鏡を見ると、髪は予想以上に短くなっていた。長話に気を取られて髪を切る時間まで長引いたらしかった。短くなった髪の両端は跳ね上がり、パイナップルの葉っぱのようになっていた。(ちょっとマズいかも)と思ったが、後の祭りだった。料金は日本円で100円ほどだった。

店を出てから、地元の若者たちと知り合いになり、近くの安食堂で一緒に酒を飲んだのだが、近くの床屋で髪を切ってもらったことを話すと、彼らは私の髪形をあらためて見て、失笑していた。(新発田北蒲原医師会報 令和7年7月号より)

